

自然会話における 「ヨネ」の意味類型と表現機能

張 恵芳

要 旨

「ヨネ」は「確認用法」の表現形式として、意味論的な立場からいろいろ論じられてきたが、主に単一の文が分析対象で、「確認用法」の対話の性質を重視する視点に欠ける問題点がある。本稿は、自然会話データを観察し、会話の流れ・話し手と聞き手のインターアクションから情報の性質を定め、それに基づいて、「ヨネ」の意味類型を捉えなおした。そして、「共感を示したり共感を求めたりする」ことは「ヨネ」の会話における表現機能だと結論付けた。自然会話における「ヨネ」の意味類型と表現機能は、先行研究で明らかにされた「ヨネ」の基本的な意味特徴からも裏付けられている。自然会話への観察を通して、「ヨネ」の「確認用法」の中身を明らかにすることができたと思われる。

キーワード

ヨネ 確認用法 自然会話 意味類型 表現機能

1 問題の所在と本稿の分析手法

この節において、先行研究の理論では解釈できない問題を提示し、本稿の分析手法を説明する。

1.1 問題提起

対話において、話し手が自分の判断について聞き手の確認を求めるいわゆる「確認用法」¹がある。例えば、次のような例である。

- (1) 疲れているんじゃない↑。
- (2) この前一回言ったでしょう↑。
- (3) 明日行くよね。
- (4) ここにあるじゃないか。

¹ 国立国語研究所 (1960: 109) の「確認要求の表現」(「話し手が自分の判断について相手の確認を求めることの明瞭な表現」)はその後、「確認用法」(蓮沼 1995)、「確認要求的表現」(三宅 1996)、「確認要求表現」(宮崎 2000; 2005) など、様々な名称が用いられているが、本稿では「確認用法」という用語を使う。その中身に関してそれほど違いがないことを断っておきたい。

「ノデハナイカ」、「ダロウ」、「ヨネ」、「デハナイカ」²などは「確認用法」の具体的な表現形式である。これらの表現形式に関しては、今まで、その意味・用法をめぐるいろいろな研究がなされてきた。表現形式の意味・用法に関する先行研究は主として単一の文を分析対象とし、「確認用法」の対話の性質を重視する視点に欠ける。また、小説の会話文や映画やドラマのシナリオなど、創作された話し言葉のデータに基づく研究が主流である。「ヨネ」に関する研究にも同じ問題がある。例えば、

(5) 同級生に加藤さんっていた {だろう／じゃないか／よね}。背の高い男の子。

(蓮沼 1995: 393)

という例において、3つの表現形式が互換性を持つと蓮沼 (1995) では記述している。このように、実例にせよ、作例にせよ、先行研究で分析に用いられた例文はその意味論的な側面が重視され、また、表現形式が含まれる文を中心に互換性の問題が論じられてきた。

しかし、自然会話においては、意味論的に互換できるとしても、置き換えてしまうと会話の流れがおかしくなるという現象がある。

(6) IF08 : で、洗い場で洗おうとすると、混んでる／／じゃん。

IF07 : /そう、混んでるんだよね。

(7) JF16 : でも無理でしょう? 仕事…

JF15 : そうだよね。

意味論的に互換性を持つ「デハナイカ」と「ヨネ」、「ダロウ」と「ヨネ」は以上の会話においては、特に IF07 と JF15 の場合、置き換えにくいと見られる。

以上の問題を解決するには、まず、自然会話をデータに、「確認用法」という枠組みを超えて、「ヨネ」の意味を再分析する必要がある。また、表現形式の意味・用法とその自然会話における表現機能を分けて考える必要があると思われる。本稿においては、「用法」は先行研究で言われている意味論的なものを指し、「機能」は会話において、その表現形式が使用される動機付けまたは効果のことを指す。即ち、会話の流れの中で何のために表現形式が用いられるのかということである。

² 「ダロウ」、「ノデハナイカ」、「デハナイカ」には様々な変異形がある。「ダロウ」には「でしょ(う)」・「やろ(う)」といったもの、「ノデハナイカ」には「んじゃないか」・「んじゃないかありませんか」、「デハナイカ」には「じゃないか」・「じゃん」などの変異形がある。論述の便宜上、「ダロウ」、「ノデハナイカ」、「デハナイカ」で一括する。なお、「ネ」も「確認用法」を持っていると三宅 (1996)、宮崎 (2005) などで論じられているが、本稿では、文末における「ネ」の用法判定の難しさを考慮して、取り上げないことにする。

1.2 分析手法

本稿は自然会話データを用いる。データの概要は次の表1の通りである。

表1 自然会話データ概要³

データ名称	『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1(日本語母語話者同士の会話)2007年版』(宇佐美まゆみ監修)
被験者と話者の関係	20代女性友人同士
会話のタイプ(データの性質)	雑談
話者の数	2(1会話における話者の数)×10(組)=20人
会話の時間	18分(1会話の平均時間)×10 → 187分50秒(総会話時間)

本稿は、2節で、より詳しく先行研究を紹介する。3節において、会話の流れ・話し手と聞き手のインターアクションから情報の性質を定め、それに基づいて、「ヨネ」の意味類型を記述する。4節では、「ヨネ」の意味類型を先行研究で明らかにされた「ヨネ」の意味特徴と関連付けて総合的に考察し、その妥当性を示す。5節においては、自然会話における「ヨネ」の各意味類型の使用率を集計し、「ヨネ」の自然会話における表現機能について考える。

なお、自然会話における「ヨネ」の出現率を表で示す際、他の所謂「確認用法」の表現形式も合わせて表示するが、記述と論述は「ヨネ」だけに絞る。

2 先行研究

「ヨネ」に関する先行研究は、主として2種類の立場がある。

2.1 意味論的な立場からの研究

宮崎 (2000)、蓮沼 (1995) などは、意味論的な立場から他の「確認用法」表現形式との比較の中で「ヨネ」の意味特徴を記述している。この立場の研究は、「確認用法」という枠組みの中で「ヨネ」を捉え、表現形式の互換性を議論の中心としている。

宮崎 (2000) では、「ヨネ」を「ハズダ」に相当する判断を基底に持つ当為系確認要求表現の1つとして捉えている。次の例において、「ダロウネ」と同じように、「ヨネ」が使用されるのは、「相手が田中でなければ問題が生じる」といった場合だと述べられている。

³ 本稿は「ヨネ」の男女差、年代差、そして、上下・親疎関係に注目した研究ではないので、「20代女性友人同士の雑談」というのは個別のデータにすぎないが、意味類型と表現機能の研究には適切なデータだと考える。なお、発話内容の記述に関する記号や書き方などは、本稿の都合に合わせて簡略化或は変更した場合がある。

(8) あなた、田中さん {ですね？ / でしょうね。 / ですよね。} (宮崎 2000: 13)

また、次のような常識に属する情報を確認する用法があり、そういう場合、「ダロウ」や「デハナイカ」と置き換え可能で、すでに典型的な確認要求ではなくなっており、次に述べることの前提を確保するために、分かり切っていること (当然そうあるはずのこと) をあえて確認する用法だと述べている。

(9) 「ファックスというのは、受信が終わるとピーという電子音が鳴りますよね。～」 (宮崎 2000: 13)

蓮沼 (1995) は蓮沼 (1992) の「ヨネ」の用法と機能に関する研究成果を生かし、さらに、「ダロウ」と「デハナイカ」を付け加え、三者を「確認用法」という枠組みの中で捉え、その互換性とそれぞれの特性について論じている。蓮沼 (1995) は、「相互了解の形成確認⁴」が「ヨネ」の固有の用法で、「聞き手ばかりでなく話し手における知識の形成がかかわる」特性を持っているとしている。

(10) 効いた {よね / *でしょ / *じゃない}、早めのパプロン。 (蓮沼 1995: 397)

そして、その延長線に「ダロウ」、「デハナイカ」と置き換え可能な「共通認識の喚起」があると述べている。1節であげた例 (5) はそういうものである。

(5) 同級生に加藤さんっていた {だろ / じゃないか / よね}。背の高い男の子。 (蓮沼 1995: 393)

「ダロウ」と「デハナイカ」を使用した場合は、認識できて当然なのにそれが認識できていない聞き手を非難するニュアンスがあるが、「ヨネ」を使った場合はそのようなニュアンスはなく、判断の共有を確認し合っているという意味になると述べている。

このように、「確認用法」の枠組みで意味論的な立場から「ヨネ」を捉える研究は、「ヨネ」の意味特徴を抽出することを目的としている。

しかし、表現形式の対話性を考えると、自然会話を見ないでは、その表現形式の研究が完全だとはなかなか言えない。そして、1節「問題提起」のところで見たとおり、意味論的に互換性を持つ表現形式は自然会話において置き換えにくい場合も出てくるのである。

従って、自然会話における「ヨネ」の意味類型と表現機能を分析する必要があるだけで

⁴ 「相互了解の形成確認」とは通常の間人であれば必ず備わっているはずの認識能力である「理解力・悟性」に訴え、相互了解を形成し、その適合を確認するといったものである (蓮沼 1995: 398)。なお、それは「確認用法」の下位用法として位置づけられる。

なく、その分析結果を用いて、「ヨネ」の意味特徴に関する諸説を検証することもできると思われる。

2.2 「コミュニケーション機能」の分析

談話の実例を観察した先行研究がないわけではない。

伊豆原 (1993; 2003) は、ラジオ番組やテレビインタビュー番組を分析資料として、終助詞「ヨ」、「ヨネ」、「ネ」のコミュニケーション機能を分析している。

伊豆原の研究は談話のデータに注目したがゆえに、「よね」の意味をより広く捉えることができたと思われる。例えば、

(11) 徹子：眠くなんないの？夜になって。

越路：いや仕事中に眠くなるんですよね。これはどういうことなのかわかんないのよ。

という「聞き手に情報がなく、確認がないもの」に関する指摘は、実際の談話を観察したからこそできたことだと思われる。

伊豆原 (2003) では、「ヨ」、「ネ」との比較の中で、「ヨネ」のコミュニケーション機能を次のように捉えている。そのキーワードはやはり、「確認」である。

「ヨネ」は話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを聞き手に確認するという過程をとることで、話し手の認識領域に聞き手を引き入れようとするものである。

(伊豆原 2003: 1)

但し、談話を観察したとはいえ、伊豆原の研究も「ヨネ」が含まれる文を中心に、「ヨ」、「ネ」との比較の中で「ヨネ」のコミュニケーション機能を考察することにとどまっている。

本稿は、自然会話データに出てきた全ての「ヨネ」を意味分類し、その出現率もあわせて観察する。そして、「ヨネ」文だけでなく、会話の流れや話し手と聞き手のインターアクションも意味分類に取り入れる。そうすることによって、「ヨネ」の自然会話におけるコミュニケーション機能(本稿でいう表現機能)とその「確認」の中身をよりの確に捉えられるのではないかと考える。

3 自然会話に見られる「ヨネ」の意味類型

この節では、自然会話における表現形式の出現率を提示し、その意味類型を記述する。

3.1 自然会話における表現形式の出現率

本稿は「ヨネ」の自然会話における「確認」の実態を研究対象としているので、まず、データにおける「ヨネ」及びその他の表現形式の出現回数を表2にあげる。

表2 データにおける「確認用法」表現形式出現回数一覧

コーパス番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
録音時間	15'13	17'03	15'58	17'27	26'14	22'29	23'07	17'54	15'08	17'17	187'50
総発話数	356	410	577	326	590	668	660	603	385	660	5235
4表現形式総回数	34	29	50	38	49	66	65	58	33	47	469 (100%)
ヨネ (話者比)	16 (<u>13:3</u>)	14 (5:9)	28 (11:17)	30 (12:18)	36 (18:18)	31 (6:25)	43 (15:28)	27 (<u>2:25</u>)	21 (12:9)	18 (9:9)	264 (56.3%)
デハナイカ	15	6	13	3	13	30	20	22	7	14	143 (30.5%)
ダロウ	3	9	9	5	0	5	2	9	5	15	62 (13.2%)
ノデハナイカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 (0%)

4表現形式の中で「ヨネ」の使用率が一番高く、半数以上も占めている。発話数で計算すると、平均で20発話に1発話は「ヨネ」が使われることになる。そして、話者比の数値からもわかるように、好んで使う人とあまり使わない人(下線で示している)もいるが、大体皆使っているという傾向が見られる。

3.2 自然会話に見られる「よね」の意味類型

「ヨネ」がつく発話はどういう意味を持っているのか、会話の流れの中で観察することは、次の2点において、単一の文の観察に比べてより正確な記述が得られると思われる。1つは、「ヨネ」発話で述べられる情報の質、即ち、話し手が聞き手一方の情報なのか或は両方知っている情報なのか、それを会話の流れ特に「ヨネ」発話前の発話を観察することで正確に捉えることができる。もう1つは、聞き手の反応つまり双方のインターアクションを分析することで「ヨネ」発話をよりの確に捉えることができる。

本稿では、以上の2つの角度から、「ヨネ」がつく発話を、A類の「確認要求」、B類の「情報提供」、C類の「共感表示・要求」に分け、C類はさらにC-1類の「共感表示」とC-2類の「共感表示+要求」を設ける。

3.2.1 A類:「確認要求」

典型的な「確認用法」というのは、従来の定義通り、話し手が自分の判断について聞き手の確認を求めることである。奥田(1984)の研究を初め、田野村(1990)、森山(1992)、

三宅 (1996)、宮崎 (2005) では、2種類があるという捉えかたが定着している。1つは、話し手が自分の推測を加えながら聞き手によりの確な情報を要求する類型である。「ダロウ」と「ノデハナイカ」はその代表的な形式である。例えば、

(12) さては、君、昨夜、徹夜した {だろウ／んじゃないか} ? (宮崎 2005: 113)

もう1つは、聞き手も自分と同じ認識を持つように、現場知識・共通体験・一般認識などに関して、聞き手に認識を要求する類型である。「ダロウ」と「デハナイカ」はその代表的な形式である。例えば、前にあげた例 (5) である。

(5) 同級生に加藤さんっていた {だろウ／じゃないか／よね}。背の高い男の子。

(蓮沼 1995: 393)

蓮沼 (1995) によれば、「ヨネ」は2種類とも使えると見られる⁵。実際、自然会話では、どの類型も観察された。例えば、

(13) JF13 : 辛いのはそんなに食べないよね。

JF14 : あんまりね。

(14) JF13 : 食費だけだよ。あの、光熱費もかからないでしょう？

JF14 : そうそうそうそう、そういうのは (うん) かからないけど。で一、なんだかんだ言って一、私も買い物するので... (2人で笑い)。

(15) IF03 : なんかさ、あの時さ、“結婚するなら日本人じゃなきゃだめ”って言ってたよね (笑いながら)。

IF04 : あー、言ってた気がする (軽く笑いながら)。

(16) IF05 : とりあえずついて行こうかなあ、みたいな... (笑いながら)。

IF06 : うん。

IF06 : 帰れる時間に帰してもらえるといいよね。

IF05 : うん。

本稿では、以上の2種類をまとめてA類とする。理由は2点ある。まず、発話時点において、聞き手のこと、特に過去の出来事などに関して、話し手が推測を加えているかどうか、両者には共通の体験があるかどうかは、判別しにくいところがある。次に、これから述べる他の類型に比べて、この2種類は聞き手に情報や認識などの「確認を要求している」という共通点を持つ。それは、(13)~(16)に見られるように、確認を求められた側が答え

⁵ 蓮沼 (1995) では、「共通認識の喚起」において「ダロウ」、「デハナイカ」、「ヨネ」が使えて、「推量確認」においては「ダロウ」と「ヨネ」が使えるとしている。

や応答を出しているというところからも確認できる。

このA類を「確認要求」と名づける。

3.2.2 B類：「情報提供」

自然会話において、典型的な「確認要求」の他に、明らかに「確認」を要求していない他の幾つかの類型も見られた。まずは、伊豆原 (2003) でも言及された聞き手にない話し手の情報を述べる類型である。例えば、次のようなものである。

(17) IF04：毎回毎回もらうんだよね、誰かから。

IF03：あほんと？〈笑いながら〉

(18) JF17：それで一、結構いま自分のほう、ことが(うん)いっぱいみたいで、(うん)時間と…れないん(うん)だよね。

JF18：そっか。

JF17：そうそう。

(19) IF01：でも、2回しかないんだよね、面接。

IF02：あ、だってあたしだって2回だったもん。

IF01：うそ。

(17)の「毎回毎回誰かからもらう」ことも(18)の「時間が取れない」ことも(19)の「面接が2回しかない」ことも話し手しか知らない情報で、聞き手に確認しようがないのである。それは、聞き手の「あほんと?」、「そっか」、「あ、だって…」といった反応からもわかる。さらに、(19)において、IF01の「うそ」という発話は「面接が2回しかない」という情報が発話時点においてIF01しか知らないことを物語っている。「確認」というよりも、新しい情報を提供しているのは明らかである。

但し、この「情報提供」類においては、文末が「んだよね」になっているのが殆どである。その1つとして、「と思うんだよね」がよく使われている。

(20) JF15：もっとさ、なんかごつい先生(うん)だと思うんだよね。

JF16：あー、そうなんだ。

その理由に関しては、4節で改めて考察する。

3.2.3 C類：「共感表示・要求」

会話のやりとりの中で、「ヨネ」を使って、相手に共感を示めしたり、共感を求めたりする類型が見られた。

3.2.3.1 C-1 類 : 「共感表示」

相手が投げかけてきた「確認要求」に対して、「ヨネ」で答えたり、或は、すでに、会話の中に出てきた情報を「ヨネ」でもう一回繰り返して共感を示したりする発話を、ここで「共感表示」とする。

- (21) IF09 : だってゼミがさ、やっぱり 5 限にあるとさ、やっぱり延びちゃう／／よね。
IF10 : /延びちゃうよねー。
- (22) IF08 : で、洗い場で洗おうとすると、混んでる／／じゃん。
IF07 : /そう、混んでるんだよね。 ((6)再掲)
- (23) JF16 : でも無理でしょう？、仕事…。
JF15 : 〈笑いながら〉 そうだよね。 ((7)再掲)
- (24) IF08 : 中でやって出てくるものなら豪華そうな気がしちゃうよね 〈笑い〉。
IF07 : だよね 〈2 人笑い〉。
- (25) IF05 : だって、怖いんだもん、なんか。
IF06 : 怖いよね。
- (26) JF15 : なんか「人名 7 名」って知っている？、「人名 7 名」。
JF16 : うん、知ってる、あの可愛い子ね。
JF15 : そうそう、可愛い。〈笑いながら〉チェック済み、チェック済み 〈大きな笑い〉。
JF16 : 可愛いよね。
JF15 : あの子可愛いよね。いやっ、性格もいいよ、すごい。

(21)~(24) は相手の「確認要求」発話に対して、「延びちゃう」を繰り返したり、「そうだ」と共感を示したりする例で、(25)、(26) はすでに出ている、双方ともはっきり知っている情報（「怖い」、「可愛い」）を繰り返す形で共感を示す例である。

こういう場合も情報や認識に関する「確認」の必要はまったくない。

3.2.3.2 C-2 類 : 「共感表示+要求」

自然会話に出てきた「ヨネ」の「共感表示+要求」類は、殆ど、次のような形を取っているものである。相手が述べていたことを自分なりの言葉でまとめて感想を述べながら、或いは、相手が述べようとしていることを先取りして述べながら相手に共感を要求する。共感を求められた相手は応答を出す。そういう意味で、この類型は共感の表示と要求を両方備えていると言える。

- (27) JF20 : でやっぱり、明らかに、企業の資本を増やすためっていうのは、／／見え

る…

JF19: /あー、そう。

JF20: なんか、それが、(うん) 当たり前なんだろうけど、(うん) なんか、うーん、
当たり前なんだけど…。

JF19: 結局は会社のためなんだよね。

JF20: うーん。

(28) IF01: こないだふと思ってね、えー、もしかして、食品とか (うん)、メーカーだ
ったら、もう少しは、通っていたんじゃないのかとか思うと。

IF02: あー、でも、相性とかあるっていうからね。

IF01: あー。

IF02: 分かんないけど、でも。分かんない。でも、さ、やりたくないのに、相性
だけ入っても、(んー) 後々きついかもしれないからね。

IF01: 微妙だよね。

IF01: 仕事だと思って、割り切って、ちょっとそんなやりたくなくても、(うん)
続けていけるのかも分かんないし。

IF02: うん。

(29) IF05: //私前のやつは。

IF06: /けっこうてきとー (笑いながら)。

IF05: すごい厳しくっ (うん) て、うち。毎朝、そのスポーツニュース部に (うん)、
電話して、なんか、“こういう人が来てます”って言って、OK もらわない
と。

IF06: マスコミは厳しくしてるんだよね。なんか今色々危ないじゃん。

IF05: まあね。

(27)では、JF19はJF20の述べている情報から、JF20が述べようとしてなかなか適切な言葉が見つからない結論を、「結局は会社のためなんだ」とまとめてかわりに述べながらJF20に共感を求めている。(28)では、IF02の「相性と仕事の関係」の発話をIF01が「微妙だ」とまとめて述べ、その後、自分もそれについてさらに語っていく。(29)では、IF05の発話からIF06は「マスコミは厳しくしている」とまとめ、IF05に共感を求めている。いずれにしても、「ヨネ」が用いられた発話は相手の発話に共感を示すと同時に共感を求める形になっている。

4 「ヨネ」の意味類型とその意味・用法特徴との関連

自然会話の中になぜ確認を要求する類型の他に、情報を提供する類型と共感を表示したり共感を求めたりする類型が現れ得たのだろうか。そして、「ヨネ」を伴う「情報提供類」と「同感類」に「ヨネ」の意味特徴がどのように生かされているのか、即ち、「ヨネ」の

各意味類型と「ヨネ」の意味・用法特徴との間にどういうふうに整合性がとれているのか、この節では、先行研究で明らかにされた「ヨネ」の意味特徴をもう一度提示し、「情報提供類」と「共感類」の実現背景について考える。そして、その実現背景は「確認要求類」にも強く反映されていることを論じる。

2節でも触れたが、蓮沼 (1995) では、「ヨネ」の固有の用法は「相互了解の形成確認」で「他から区別する本質的な相違点はこの用法では、聞き手ばかりでなく話し手における知識の形成がかかわるといふ点 (p402)」だと述べている。本稿は、それを「ヨネ」の基本的な意味特徴だと考える。それをわかりやすく言うと、他の表現形式は確か不確かに関わらず話し手はあらかじめ自分なりの認識を持っていて、それに対して、「ヨネ」は話し手の認識がまだ形成中だということを積極的に表明する形式である。

まず、「情報提供類」について考える。

3.2.2節で現象としてあげられたが、「情報提供類」の「ヨネ」発話は文末が「んだよね」になっているのが殆どである。

(19) IF01 : でも、2回しかないんだよね、面接。

IF02 : あ、だってあたしだって2回だったもん。

IF01 : うそ。

発話の場で、自分の知っている情報を一方的に聞き手に告げるのではなくて、まず、「ノダ」を付け加えて、その次に「ヨネ」で伝えることには、次のような仕組みが考えられる。

まず、「ノダ」の使用に関する仕組みである。McGloin (1983) によれば、「ノダ」は聞き手と情報を共有しているかのように提示することによって共感を作り上げたり、話し手の立場に聞き手を引き込んだりすることのような非常に創造的なポライトネス・ストラテジーである。

ここで、「ヨネ」も「聞き手と情報を共有しているかのように提示する」役割を果たしていると考えられる。もし、「ダロウ」や「デハナイカ」のような表現形式なら、聞き手の既有知識も問題となってくるが、「認識形成中」という「意味特徴」を持つ「ヨネ」は、二人が協同して発話の場で共通理解を形成していくところに重点が置かれているので、「聞き手の既有知識」を問わなくてもすむわけである。即ち、話し手にしかない情報を「ヨネ」をつけて提供することは、「ヨネ」が「認識形成中」だからこそできたことである。結果として、一方的な報告ではなくて、情報の共有や認識の共感を重視する発話となっている。

「共感類」の場合はどうだろう。

まず、C-1類の「共感表示」は、相手の「確認要求」を受けて「ヨネ」で共感を示したりすでに明らかになっていた情報を繰り返したりするようなものである。

(7) JF16 : でも無理でしょう? 仕事…

JF15 : そうだよね。

それも、「ヨネ」の「認識形成中」という意味特徴を十分生かした類型である。相互了解を形成するということは自分の認識を組み立てると同時に聞き手を引き込むことである。

そして、C-2 類の「共感表示+要求」も、話し手の認識を形成する過程を前面に出した類型である。相手の発話内容をまとめたり相手が言おうとすることをかわりに言ったりしながら相手に共感を求めることは、正に話し手の認識の形成と相手への引き込みが併せ持つ「共通了解の形成確認」である。

ここで最後に、B 類と C 類の実現背景を用いて、先行研究で言われている「ダロウ」や「デハナイカ」にあるが「ヨネ」にない「当然認識できるはず」というニュアンスを解釈してみる。

(30) そんなことすれば怒られるのは当然 {だろう／じゃないか／だよね}。

(蓮沼 1995: 403)

「共通了解」を形成することを目的とする「ヨネ」発話は A 類の「確認要求」においても、「情報や認識の要求」というよりも、発話は常に「共感を要求」する傾向が見られるのである。そして、もし、その「認識」は相手の発話や発話の流れから導き出されたものであれば、C-2 の「共感表示+要求」類へ移行していく可能性も十分ありうる。実際、会話の中で、A 類なのか、C-2 類なのか、判定しにくいものも幾つか出た。

(31) IF03 : したら MD で録ってればさー、よかったのかって思ったら、すごい悔しい
と
思っ
て。

IF04 : そうなんだ。

IF03 : だからね (笑いながら)、これは、買わなきゃと思ったんだ。

IF04 : なんか、時代の流れに乗ってないと、減点されるよね (2人笑い)。

IF03 : そうそうそう。

以上の論述から、会話における「ヨネ」の意味類型と意味論的に論じられている「ヨネ」の意味・用法特徴との間に、整合性があると言える。そして、話し手が共感的会話を作り上げるために、相手に共感を求めたり共感を示したりするのが、「ヨネ」の所謂「確認用法」の中身だということも確認できた。

5 節では、データにおける「ヨネ」の意味タイプの分布から、さらにこの見解を述べ、「ヨネ」の表現機能をまとめる。

5 データにおける意味類型の分布から見る「ヨネ」の表現機能

3 節では、会話の流れと話者のインターアクションから情報の質を定め、それに基づいて、自然会話における「ヨネ」の意味類型を大きく3種類、小さく4種類に分けた。相手に情報や認識の確認を要求するA類、相手に情報を提供するB類、相手に共感を示したり求めたりするC類で、C類はさらに、共感を示すC-1類と共感を示しながら共感を求めるC-2類に再分類できる。

自然会話データに出てきた「ヨネ」を以上の基準に基づいて振り分けた。結果は表3の通りである。

表3 データにおける「ヨネ」の意味類型分布一覧

コーパス	A類 (確認要求)	B類 (情報提供)	C類		合計
			C-1類 (共感表示)	C-2類 (共感表示+要求)	
1	2	3	4	7	16
2	6	4	0	4	14
3	5	6	12	5	28
4	4	4	12	10	30
5	6	5	7	18	36
6	10	2	11	8	31
7	13	6	12	12	43
8	3	1	12	11	27
9	4	5	5	7	21
10	4	0	7	7	18
合計	57(21.6%)	36 (13.6%)	82(31.1%)	89(33.7%)	264 (100%)

C-1の「共感表示」類は全体の31.1%を占め、C-2の「共感表示+要求」類と合わせると全体の65%近くになる。また、4節でも述べたが、Aの「確認要求」類も「共感を要求する」傾向が見られ、Bの「情報提供」類も「情報の共有」や共感を狙った一種の「擬似的確認」である。従って、自然会話における「ヨネ」の表現機能を次のようにまとめることができる。

「ヨネ」の表現機能：「確認」という形式を借りて、共感的な会話を作り上げるために、話者は相手に共感を求めたり、或は、共感を示したりする。また、共感の表示と要求が共存する特色がある。

「共感を示す」ことも「共感を求める」こともでき、しかも、共存可能なのは、「ヨネ」の「認識形成中」という基本的な意味特徴に起因している。また、自然会話においては、4種類の意味類型を出している。例(26)は両者の共存を物語る好例である。

(26) JF15: なんか「人名7名」って知っている?、「人名7名」。

JF16: うん、知ってる、あの可愛い子ね。

JF15: そうそう、可愛い。〈笑いながら〉チェック済み、チェック済み〈大きな笑い〉。

JF16: 可愛いよね。

JF15: あの子可愛いよね。いやっ、性格もいいよ、すごい。

6 まとめと今後の課題

本稿は自然会話データを観察し、「ヨネ」の意味類型と表現機能について考えた。会話の流れや話者のインターアクションを視野に入れて、「ヨネ」の意味類型を捉えなおした。そして、「共感を示したり共感を求めたりすること、或は共感を示しながら共感を求めること」は「ヨネ」の会話における表現機能だと結論付けた。「ヨネ」の会話における意味類型と表現機能は、先行研究で明らかにされた「ヨネ」の基本的な意味特徴からも裏付けられている。「ヨネ」の「確認」の中身を明らかにすることができたと思われる。

20代の女性友人同士の会話データから得た結論は、男性同士や異性同士、また、違う年齢層の会話にも見られるかどうか、更なる検証を今後の課題とする。

参考文献

- 伊豆原英子 (1993) 「終助詞「よ」「よね」「ね」の総合的考察—「よね」のコミュニケーション機能の考察を軸に—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1号: 21-34,名古屋大学留学生センター.
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号: 1-15.
- 元智恩 (2003) 「断わりとして用いられた「ノダ」—ポライトネスの観点から—」『計量国語学』24(1): 1-18,計量国語学会.
- 奥田靖雄 (1984) 「おしはかり(一)」『日本語学』3-12: 54-69.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店.
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型(1)—対話資料による分析—』秀英出版.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法』和泉書院.
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」筑波大学つくば言語文化フォーラム編『対照研究 第二号: 発話マーカーについて』.

蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為 「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編『複文の研究(下)』 389-419,くろしお出版.

三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111-122,日本語教育学会.

宮崎和人 (2000) 「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106: 7-16,日本語教育学会.

宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房.

森山卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101: 64-83.

McGloin, Naomi. H. (1983). Some Politeness Strategies in Japanese. Shigeru Miyagawa., & Chisato Kitagawa. (Eds.), Studies in Japanese Language Use(pp. 123-145). Edmonton, Alberta, Canada: Linguistics Research, Inc.

張惠芳 (2008) 〈关于日语“推量要求确认”表达形式「だろう」、「のではないか」、「ね」的考察—从信息传达和语用学角度—〉《日语研究》6,商务印书馆(北京).

資料

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1(日本語母語話者同士の会話)2007 年版』
(宇佐美まゆみ監修)

文字化記号凡例

- 、 ポーズ。
 - 。 1 発話文。
 - … 言いよどみ。
 - ー 長音。前のモーラがのばされている。
 - ? 疑問文につける。
 - () 聞き手からのあいづち的な発話。
 - < > 非言語行動。
 - ／／ 発話の重ねられている部分(始まり)。
 - ／ 発話を重ねている部分(始まり)。
- (張惠芳 筑波大学大学院生)

The Semantic Type and Expression Function of YONE in Natural Dialogue

Huifang ZHANG

As one of the expression forms of “confirmation”, YONE has been analyzed much from the perspective of semantics by the previous studies. These studies, focusing on the sentences containing YONE, have not given sufficient weight to the dialogue nature of confirmation. This dissertation, with natural dialogue materials as the target of analysis, defines the nature of the information from the dialogue process and the interaction of two dialoguers, and reclassifies the semantic types of YONE. The expression function of YONE in the dialogue is “to seek and express sympathy”. The semantic type and its function are closely connected with the basic semantic characters explicitly demonstrated by the previous studies, and integrated with each other. This observation on the natural dialogue discloses the connotation of confirmation of YONE.